
紅色に染まる夏

備前長船長光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅色に染まる夏

【Zコード】

N8008X

【作者名】

備前長船長光

【あらすじ】

かつてこの世には一匹の鬼がいた
鬼は元は人だった
しかしある人を助けるために
悪鬼になった…

鬼は友を殺し

家族を殺し

己の良心を殺し

神を殺し

復讐者をも殺した

そして最後には…

ある年の夏、神那学院に兄妹が転校してきた

転校して来るはずの無い兄妹の転校により

伊東誠悟を中心とする周囲の時が歴史が狂い始める

これは、そんなお話

これは、純粋な恋愛ものではない
純愛を望む者は無用である

この話は歪んだ恋の物語である

プロローグ（前書き）

初めまして備前長船長光です
この作品が初投稿なので拙い文書ですがどうぞお楽しみください
完結させるつもりでいます

中身は恋色空模様で主人公が装甲悪鬼村正の善惡相殺
の誓いを立てたという設定の二次創作になります。

この作品は原作のイメージを崩壊させる可能性が高いので
嫌な人は絶対に観覧しないでください

残酷な描写多々出てくる可能性が高いので
そのような表現の苦手な人もぜつた観覧しないで下さい

プロローグ

茜色に染まる人気のない砂浜に一人の男が立っていた

一人は夏というのにブレザーを着込みその下に帯刀している男
もう一方は白い半袖のYシャツを来ていてる学生だった

二人は何も言わずに夕日が海に沈む様子を 茜色に染まる空を眺めていた

その間、静かな波の音が二人を包む。
しばらく時間が静かに流れゆく

突然、ブレザーの男が何かの覚悟を決めたかのように唐突にYシャツの男の方に体を向けた

ブレザーの男「誠悟」

誠悟「え？」

ブレザーの男「すまない……」

誠悟「なんだ、や」

その言葉と同時にブレザーの男が剣を抜刀する

フオン

先ず刀が風を切り裂く鋭い音がする

次に ドサッ と首が落ちる音がする

最後に ドタッ と身体の倒れる音がする

まるで操り人形の糸が切れるように誠悟は倒れた

誠悟の体から 首のあつた場所から 鮮血が吹き出す

落ちた首が

光のない瞳が

こちらを見つめる

どうして?と言いたげに…

よく惨劇の現場を血の雨が降ると形容するがまさにその通りである

ブレザーの男は紅色に体を染める

女「兄い……」

その声にブレザーの男は振り返る、そして一瞬、驚きの表情を浮かべる。

しかし、それは一瞬だけだった次の瞬間には暗い顔をし、そしてその女の名前を呼ぶ。

ブレザーの男「美琴さんか……」

美琴「よくも兄いを絶対に許さないつやッ」

そいつの名を言おうとすると同時にそいつの目が妖しく光るのを幻視した

直後

美琴（体が、動かないなんであつ、このオンボロがなんで今動かないの？）

ブレザーの男「心ノ一方をかけた…………お前にも謝る…………すまん……な」

美琴（しんのいつぱう？）

そいつ言ひとブレザーの男は刀を肩に担ぐようにしてこちらに向かつてくる

ゆつくりと、しかし、確実に歩いてくる、私を殺すために……

悲しそうに血の涙を流して笑いながら

私はその時、思い返していた

あの楽しかつた日々を

悲しい事もあつた日々を

大変だつた日々を……

男がついに私の前まで来る

それはさながら死神のようだつた

それは今、正に私の命を刈り取るだつた

死神

そう思つたと同時に、死神は刀を振り下ろす

私は、斬られる刹那の瞬間が一秒にも一分にも感じる最中に思つた
その人と居る時お兄いが一番樂しそうにしていた事を
もう一度、見たいと思つた優しい笑顔の兄いを
もう一度…来世なんて要らない替わりに、あの日々に戻りたいと願
つた

あの皆で頑張つた夏に戻りたいと…

それがその少女の人生最後に思つた事だつた

男は、美琴のデスマスクを記憶に残しそして十六夜を眺め月明かり
に血刀をかざしながら言葉をつぶやき始める
ブレザーの男「すまんな…俺はまだ死ねないんだ…そつ…
…まだ」

男はそうつぶやくと血振いし刀を鞘に納める
そして、歩き出す人を殺すために
その道中楽しかった日々を思い返しながら
戻れるものならば戻りたいと思いながら…
男は、歩いて往く…修羅といふ名の道を…

プロローグ（後書き）

次回より主人公設定などを公開します
遅くとも月一で公開しますのでよろしくお願いします

人物紹介（前書き）

備前長船長光です

恋色空模様を恋愛ものとして書かれている人が沢山いるので
私はダークの方向で書こうと思いました

この小説は原作のイメージを壊したく無い方まだ未プレイでこれら
をプレイする

予定の方は観覧しながらください

それでも見たい方は自己責任でお願いします

主人公の名前や妹の名前あと家族の名前など色々な裏設定が隠され
ているかもしませんので最後まで観覧していただける方はお楽し
みにしていてください

それではよろしくお願いします

人物紹介

人物紹介

八雲八坂
やくも やさか

本作の主人公

年齢 16歳 高校2年

誕生日 8月8日

身長 178?

体重 68kg

体格 筋肉質

趣味・特技 睡眠 料理（プロ級の腕前）

学業成績 優秀・常に五教科70点を取っている（本当は100点を取れるのだが残り30点分を珍回答に費やしている）

ただし英語は聞き取りとペーパーテストは大丈夫だが発音が苦手のようである

嫌いな物・事 正義 殺人 マヨネーズ（食べると気分が物凄く悪くなるらしい） ドマト 女性

好きな事・物 日々の稽古 刀の手入れ 掃除

性格 冷静沈着 ぶっきらぼう 無口 努力家

一人称 私 私 私 僕 自分 わし 小生 等その日の気分によつて常に違う メインは私 僕

東京の学校から神那学院に転校してきた

誠悟とは親友だった（本人談）

主人公の家は代々刀鍛冶なので主人公も刀鍛冶であり技術を余す所なく受け継いでいる

同時に家伝の武術も受継いでおりその腕前は相当の物だと言われている。

実は拳銃や小銃なども使えるらしい。

なぜか良く解らないがガラの悪い人や武術家崩れなどに喧嘩を売られる（誠悟曰くその様な人を寄せ付ける念波ねんぱが出ているらしい）
苦手な相手対手は銃剣を使う人間

ある事件を境に髪が白髪はくはつになってしまった

同時にその事件で右目と右肩に武術家生命を失うほどの重傷を負つた
ゆえに外見的特徴としては右目には刀傷があること（見えない）とい
うわけではないのだが

光に弱くなっているため夜にしか目を開られない

右肩も動かせない訳ではないのだがある一定の角度に達すると激痛
が走るらしい

名前の由来は家に代々伝わる刀剣 伝 村正 の銘なが 八坂やさかだか
らと言われている。

主人公の愛刀あいとう

略式九八式下士官軍刀 刃長 66.7? 反り2? 無銘 祖父
の最高傑作にして唯一つの遺品

木目調の仕込み杖 刃長 66.7? 反り1? 伝 村正 号
八坂 家伝の名刀

他にも刀が多数あるが主に今使っているもの

あまり妹にかまわないが大切に思つており妹を命をかけて守るべき
存在だと思っている

妹を嫁として貰い受ける条件は自分を倒す事と命をかけて守る事が
出来る相手にしようと思っている

あまり弱点の無い完璧超人に見えるが 猫舌や乱視 など細かい

弱点が沢山ある

余談だが本人は無痛症であり痛みを感じないこの事を知っているのは彼の家族だけであり現在は

唯一の肉親の妹だけである

八
雲
月
星
やくも
あかり

主人公の妹

年齢 15歳 高校1年

誕生日 8月12日

身長 154?

体重 非公開 ただ八坂曰く軽いらしい?

趣味・特技 兄の世話 花嫁修業?

学業成績 八坂ほどではないが60点を切った事が無い

嫌いな物・事 兄以外の男性が苦手（誠悟以外）姉（故人）

好きな物・事 兄 兄の傍に居る事 兄の手伝い 兄の作る料理

性格 天真爛漫？ 真面目？

一人称 私
わたし

兄について東京から神那島まで一緒に来る

兄の事が大好きだと公言しているが当の八坂はほとんど無視している模様

兄妹で結婚できるようにするべきだと本気で思っている

同年代の女性に比べると小柄な割に体力と運動神経がいい

兄が片手と片目しか使えないのその代わりになりたいと思っている
八坂の前では怒らないが八坂が居ない所では気に入らないと怒るらしい

誠悟曰く怒らせると物凄く怖いらしい（トラウマになる人が10人に1いるくらい）

実は本当の兄妹ではない事を知つており隠している（この事を八坂

は知らない

人物紹介（後書き）

どうだったでしょうか?
と言われても困りますよね
次回からお話をります
主人公の家族の名前などはその時になつたら
投稿しますのでよろしくお願ひします
できれば感想をお願いします
今後の参考にする予定です

第壱話 再会《累説》そして始まり（前書き）

皆さんお待たせしました
やつと第壱話が完成しました
出来はあまり良くないので
後ほど修正するかもしれません
まあとにかく皆さん
楽しんでください

第壹話 再会へ異説 そして始まり

突然だが、俺達兄妹は今、冷房のきいたタクシーの中に居る
神那島大橋を渡っているもなかだ

え？ 俺は誰かつて？

俺の名前は、ハ雲^{やくも}、ハ坂^{やさか}だ。これからようしくな

てつ、俺は一人で何をやつていてる？

アホくさッ

とつ、話に戻るつか

なぜ、わざわざ本土からこんな島まで来なければならなくなつたのか
それは簡単な話だ…

退学になつたから転校した。それだけの話だ

何故、退学になつたかって

それは後ほど話しましょう

きつと後で、回想とか、夢とか、何かで話すことにしよう
忘れなければ。

運ちゃん、「一さん、仕事何やつてる人？」

運ちゃん、「一ちゃん」

俺（この上なく運ちゃんがウザイ）

俺、「うぜえよ、話しかけるな」

俺、「それより運転に集中しろよ……」

俺（そんな質問されても無理ないか…この見てくれじやあな…）

運ちゃん、「…」

俺「…」

運ちゃん 「…………」

俺 「…………」

運ちゃん 「…………」

俺 「…………」

妹「スウ スウ スウ」

運ちゃん・俺(会話が無くなつた……非常に『気まずい』)

運ちゃん・俺(早く時間よ過ぎろ)

そんな二人の願いが通じたのか一分ほどで目的地に着いた。

運ちゃん「お客さん着きましたよ」

運ちゃん「18962円です」

俺「一円からよろしく」

俺「おい、月星着いたぞ、起あきこりあ」

月星「うううん、よく寝た」

俺「本当にな」

運ちゃん「えっとお釣り1038円ね」

俺「はいよ」

そして俺たちはタクシーを降りた

バンツ

そしてタクシーはすぐに見えなくなつた
まず島に着いたのはいいとする

どこに泊まろう、まあ最悪野宿……だな

ハア 金があつても泊まる所がなきや それこそ宝の持ち腐れだ
よなあ)

この島に住むかは、まあ明日学校に行って、資料を出して
試験を受けてみないことには判らないしな

月星「お兄様、何を考えているの?」

ハ坂「ああん、ちょっとな」

月星「まさか、他の女の事ね!」

月星「私というものがありながら!」

ハ坂「何故そうなる、だいたい何時からそんな関係になつたんだ!」

月星「何時からなんて酷いわ、私はこんなにお兄様の事を愛しているのに」

八坂「はいはい、俺も丼いつぱい愛してるよ」

八坂「そんな事より、今夜の宿だ」

月星「そんな事ですって！」

八坂「何だろすごく頭が痛くなつてきた」

月星「お兄様、風邪を引いたの！」

月星「それは大変だわ、今すぐ休みましょう、そこらへんの茂みの中で」

八坂「あ、なんか治つた、もう大丈夫」

月星「本当？」

八坂「ホント ホント、もう一？ 全力ダッシュできそくなくらい」

月星「そう」

八坂（なぜそこで落ち込むのだ、マイシスター）

妹のことが全然わからない

八坂（はあ だるいな、これからどうすつかな）

八坂（ AAPAAN

八坂（銃声？）

（それも獵銃じやない、トカレフのものだ！）

（俺の耳が正しければあいつの物だ！）

俺は考えながら無意識のうちに愛刀の入ったバッグを肩にかけ

俺は走り出すその銃声の元へ

その最中に俺は幻聴いた義兄弟の声を

*少し時間をさかのぼり、神那島では

チンピラA「兄貴！伊東誠悟がいやした、それも女連れですぜ」

兄貴風の男「そうか……分かった」

誠悟「彩、そろそろ帰るか？」

彩「今日の夕飯は何なのせいちゃん？」

誠悟「今日はから揚げにしようと思つたがどうだ？」

彩「わふつやつたあー」

兄貴風の男「失礼、つかぬ事を伺いますが伊東誠悟さんですね」

誠吾「そ… そうですけど何か？」

兄貴風の男「八雲八坂さんを『存じですね？』

誠悟「はい、知つてますけど何か？」

兄貴風の男「どこに居るんですか、家の若いもんがこの島に居ると
言つているのですが」

誠悟「知りませつ」ゴブツ ゴホツ ゲホツ ゲホツ

誠悟が否定しようとすると兄貴風の男がいきなり誠悟の鳩尾を殴り
つける

彩「せいちゃん！！」

チンピラA「動くんじゃねえ」

チンピラAはそう言つと鈍く黒光りするテレビでおなじみのあれを
周りに見えないようになに彩に突き付ける

兄貴風の男「お嬢さんあまり騒がないでいただきたい…あなたが騒
げばこの男を殴る、誠

悟さん あなたが騒けばこの女を殴る」

彩「ツ！」

誠吾「なツ！」

兄貴風の男は言つた、それは冗談などでは無かつた男の眼はそう告
げていた

兄貴風の男「そつ言えば人気のない海岸がありましたねえ、そこで
ゆっくり話しましょうか」

誠悟「ふざけツ」

ドスツ

彩「ゴホツ」

兄貴風の男は本氣で彩の鳩尾を殴つた、しかし、彩はその一撃で落ちてしまつ

だが男はそれにかまわず、もう一度次は腕を振り上げる
誠悟「待つてくれ、分かったから…頼む…」

誠悟がそう言つと男は振り上げた腕を下ろした そして、海岸へと向かう

ガチャン

店のおばちゃん「ひつ」

チンピラB「何してゐるの？ 僕らはただひよつと尋ね事をしてゐるだけだからさあ」

兄貴風の男「何をしている… もうあと行くぞ…」

そう兄貴風の男が言つとチンピラBはあわててはしづだす余程怖いに違ひない…

チンピラB「へいっ、すいませんでした 今行きますッ」

海岸に着くと男の尋問が始まった

誠悟と彩は身動き出来ないよう木に縛り付けられている
更に彩は喋られない様、猿轡さるくつわまでされている

兄貴風の男「で 誠悟クン 八坂はどうにに居る」

誠悟「わからない」

チンピラA「ああ？ 分からねえだ ふざけんじゃねえぞ」

兄貴風の男「はははははは」

男はいきなり笑いだす それにつられ誠悟も

誠悟「ははは…はははは」

兄貴風の男「何がおかしい！」

突然 兄貴風の男が怒り出し

上空へ向けて一発、発砲する

そして、兄貴風の男は鈍く黒光する物を俺に押し付ける

男は言った

兄貴風の男「お前はもう用済みだ、死ね」

彩「ふえういふあん！」

男は誠悟の中に銃口をねじ込みながらそう言ひ放つ

兄貴風の「バン」

誠悟「ヒツ」

兄貴風の男「てつ、本当に撃つわけないだろ？！」

そう言ひて男は海の方へ式拾歩ほど歩く

それを見た誠悟は思わず息が漏れる

誠悟「はあ」

誠悟が息を漏らすと同時に男は振り返り銃を両手で構えながら言ひ放つ

邪悪な笑みを浮べて

兄貴風の男「てな事言つわけ無えだろ？！」

兄貴風の男「こちどらマフィアだぜえ、殺しなんて何とも思つわけ無えだろ？！」

誠悟「ヒツ」

誠悟（やだ、やだ、まだこんな所で死にたくない）

誠悟（誰か、助けてくれ）

兄貴風の男「まあ、お前殺しても金にならないしな」

男はそう言ひ放ち銃をおろす

誠悟（よかつた、これで助かる…）

だが、男はまた銃を構える

素人目に見てもいかにも精密射撃の構えである

そう構えながら男は話し始める

兄貴風の男「でも、顔を見られたからには殺すしかないんだよ」

言葉を発し終えると同時に、男は発砲する

パン

男が撃つた弾は誠悟からは大きく外れ縛り付けてある木に当たった

兄貴風の男「でも、まあ、そうですねえ」

兄貴風の男「八坂の居場所を教えてくれたら何もしない、約束しよ

う」

誠悟「本当に知らないんだ！」

誠悟「本当に信じてくれ！」

誠悟は目に涙を浮べながら男に助けを懇願する
だが、しかし、男はニヤリと邪悪な笑みを浮かべ
銃口を誠悟に向ける

そして男は、ゆっくりと人差し指に力を入れ始める

男が指に力を入れ始めたとき四人の人間の思考が交差する

*彩 視点

(このままじやせいちゃんが殺されちゃう)

(誰でもいいからせいちゃんを助けて)

(せいちゃんを助けてくれるなら…)

(神様でも)

(悪魔でも)

(何でもいい)

(私の命と引き換えでもいい…)

(だから…だから…誰かせいちゃんを助けて…)

*兄貴風の男 視点

(こんな奴を殺してもつまらんだけだ)

(だが…だがしかし)

(こいつを殺せば、あいつは怒るだろう)

(本気の剣を、見せてくれるだろう)

(俺は、俺の復習を果たし、あいつと殺しあえる)

(そのために、俺は、この男を殺す)

伊東誠悟

(あいつにも俺と同じ苦しみを味合わせる事が出来る)
そつ、故に俺は笑いながらこいつを殺すことが出来る

「さよなら、伊東誠悟君」

* 誠悟視点

(こんな所で死にたくない)

(誰か助けてくれ)

そんなことを思っているはずなのに
頭の中ではすでに諦めているのを感じている
それは、死を、受け入れたからだ
不条理でも、死を受け入れてしまつたからだ
そんなことを考えている時

ふと思つ 妹の美琴の事を

(ごめん、美琴、俺、今日、死ぬみたいだ)

眼前の男の指に力が入る

その瞬間が「マ」送り再生される

一分にも一時間にも思えるほどの遅さで

(次の瞬間には俺は死ぬのだろう)

そう思うと、誠悟は一人の男の事を思い出した
東京に居た時の親友のことを

いつもピンチのときにヒヨツ「コ」現れ

助けてくれる男の事

そして、男と初めて話した時に言われた事を

男(ピンチになつたら、助けが必要になつたら

俺の名前を呼べ、何時でも駆けつける)

男(俺の名前は)

兄氣風の男「さよなら、伊東誠悟君」

八坂！

*八坂 視点

(見えた!)

(ここに来る前に麻酔は打った 問題ない)
だが、しかし、少々遅かったようだ
黒の高級そうなスーツを羽織った男は
誠悟に銃口を突きつけていた

声は聞こえない

しかし、男が何を言つているのか理解は出来た
「さようなら、伊東誠悟君」

それを理解した瞬間、時間が急に遅く感じる
俺の足が遅く感じる

(間に…合わない…のか?)

(また…)

(そんなのは、もう、ごめんだ)

あそこまでひと翔け出来る翼が欲しい

それがダメなら時間だ

そう、時間が欲しい

八坂!

イッソ、ジカンガトマツテシマエバイイ

(どうしたのだろう周囲時間が時の流れが
止まつたような気がする・周囲が色あせる)
(だが、しかし、これで間に合つ!)

八坂
誠悟(銃声?)

誠悟(銃声?)

誠悟（何で？）

誠悟（そつか、きっと、痛みを通り越して感じないのか）

男の声「あゝあ、勿体ねえ

おろしたてのスーツなのにな」

男の声が聞こえる

男の声「兄弟、待たせたな」

一瞬誰か理解できなかつた

しかし、それは俺が待ち望んでいた者の声であつた

懐かしい白髪

悲しそうな瞳

見間違え様の無い目の刀傷

そして、本人も言つた見慣れたデザインの

漆黒のスーツ

誠悟「八坂？」

誠悟「本当に八坂なのか？」

八坂「俺以外に八雲八坂が居てたまるか」

八坂はそう言いながら左腰に帯刀している軍刀を左手で抜き、誠悟と彩の体を縛っているロープを斬るそして、八坂はお気に入りのスーツを脱いで誠悟に渡す

八坂「それ着てその影に女と二人で隠れてろ」

彩（願いが通じた）

（せいちゃんを助けるために、神様は願いを聞いてくれたんだ）

誠悟「彩、隠れるぞ」

せいちゃんを助けてくれた人は
暗い瞳をしていて

だけどすごく優しそうな男の人

それが、私の八雲八坂への第一印象でした

兄貴風の男「八坂！」

八坂「なんだ、五月蠅いな誰だ？」

兄貴風の男「なつ、忘れたとは言わさんぞ」

八坂「すまん、忘れた、弱い奴は覚えてないんだよ」

兄貴風の男「俺の名前は、たかだしげゆき高田重行だ」

八坂「高田？」

八坂「高田、高田…高田」

八坂は男の名前を幾度かつぶやき、ややあって思い出したと言わんばかりに手のひらをポンと打つ

八坂「思い出した、あの雑魚か」

八坂「お前なんかどうでもいいんだ、邪魔だ、ひとつと、ひとつか失せろ」

高田「…………雑魚オ？」

男の声調が変わる

何も考えずに発した八坂の一言は、ざつやらいわゆる地雷だったらしい

先ほどまで草食獣のような人間だった高田が肉食獣へと変貌するそして、肉食獣は、うなりを発する

高田「ああ、今なんて言った、てめえ…雑魚つて言ったのか？」

八坂「なんだ？、もしかして禁句？、プライドにかかる言葉だった？」

八坂「悪い悪い、俺は言わなかつたことにしどくから、お前も聞かなかつたことにしどくから」

高田「なんて言つたかつて聞いてるんだよ」

八坂「邪魔じやないけど、どこかに行つてくれませんか

ハンサムなお兄さんつて言つたんですよ。きっと。多分

高田「雑魚つて言つてんだろうが…！」

八坂「解つてんなら聞くなよカス。あつ、いや、えつと、おつめんじや縮緬雑魚のよがな星空だなつて言つただけですよ。常に新しい表現の道を模索する

風流な俺。」「

高田「……」

高田には納得した様子が伺えない
今にも発砲してきそうな気配ならば、この茜色の空模様の下にも明らかなである

ついでに言つと逆光で物凄く見づらい

どうやら説得は失敗に終わったようである。

火に油を注ぐつもりは毛頭無かつたが素で受け答えをしたら
結果がこうなつてしまつたらしい。

自分の事なのに、まるで他人事のようである。

しかし、気が付くと俺は刀を鞘に仕舞そして居合いの体制をとつて
いた

その自分の体制を見てから、相手の表情を見ると、怒りが加害行動
を生まずに
収まるラインをとつの昔に過ぎていたので、なるほどと自分に感心
した

高田は抜刀する。しかし、そこには殺意が無かつた。

高田は、抜刀した刀を上へ掲げる、一見片手上段の構えをとつたか
に見えたが違つた

上げた刀を振り下ろしその切つ先を俺へと向ける

高田「突貫！」

八坂「なつ！？」

高田はそう言つなり、を蜻蛉の構えにて手下三人と一緒に切り込んでくる

猿叫を上げて

並みの者ならばそれだけで氣死する事だらう
肝を潰すだらう

八坂とてほんの一瞬、肝を潰しかけた

八坂「つ！」

しかし、流石は八雲流活殺術、現当主である

冷静に相手との距離を測る

高田と手下の間には5mほど有る

俺はまず突っ込んできた高田を左足をさげそしてそれを軸に時計回りにかわす

八雲流活殺術 居合技 クッカケ 脱掛

そして本来ならば抜刀し斬り付け殺す

が、今はそのようなことは出来ない

その代わりに手刀を見舞う、すると

男は派手にコケそして盛大に転げまわる男の剣は八坂から3mほど

の位置に落ち

その扱い手はそこから更に8mほど吹っ飛んだ。

吹っ飛んだ高田は今はとりあえず無視し

手下の三人に意識を向ける

三人は同時に並んで迫ってくる

流石の八坂もこれを避けるのは至難の業だ

三人が同時に飛びそして刀を振り下ろす

八坂はそれを見て抜刀する

八坂（八雲流活殺術 秘剣 零閃）

パキン

と甲高い音を鳴らし参振りの刀が虚空へと吸い込まれるように折れ飛ぶ

男たちは八坂の眼前で止まっている

先ほどの高田との実力の差はあまりに大きい

俺は跳ぶそして体を回転させる

まず右足で右に居る奴の後頭部に一撃

そしてその反動を利用し左足、踵で相手の顔面を強打そして左足をそいつの肩に置き上へ

跳ぶ

そして宙にて一転し脳天と強打する

（八雲流活殺術 無刀技 破壊の舞参連撃）

八坂は膝を曲げ着地するそして振り返る

(八雲流活殺術 居合 秘刃 零閃編隊伍機)

キン チン パキン バキ カチン

空から先ほどの刀の残欠が降つてくる俺はそれを切り捨てる

俺は起き上がる高田に刀を投げ渡す

高田「何故?」

高田は問う

俺は答える

八坂「勝負したいんだろ?、だつたら決着つけよっぜ」

高田「いくぞ!」

そう叫び、太刀を蜻蛉に構える

高田「キエー——————イ

猿叫を上げこちらに向かつてくる

俺は帯から刀をはずし左手に持つ

死が近づいてくる

一步、壹歩

俺は剣を抜く

そして相手の剣を刃を心を闘志を両断する

左の鞘で相手の側頭部を強打し意識を奪う

(八雲流活殺術 居合 一段抜刀術 双龍閃壹之型)

俺は勝つた、しかし、何も思わない

自らよりも弱き者を倒して歓喜など出来ない

歓喜するほど俺は自惚れではない

いや、その思いこそが自惚れなのだろう

俺にはもっと強い敵が必要る何時会えるかは判らないがしかし、近い内に会えるそう信じている

誠悟「八坂!」

誠悟が女と一緒に走り寄つて来る

八坂「おう、兄弟!、大丈夫だったか?」

誠悟「ぜんぜん、大丈夫じゃない」

八坂「だろうな、そんだけ顔腫らしてたらな」

誠悟「じゃ、聞くな」

八坂「それもそうだな」

誠悟「それより、どうしてこんな所に居るんだ?」

八坂「それは…こっちの学院に転入するためだ」

誠悟「それはずいぶん急な話だな」

誠悟が驚く まあ 無理も無い

八坂「ああ、ちょっと退学になっちゃって

んでもって、こっちの方は、兄弟も居るから
行き易いと思つてた」

誠悟「住む家はあるのか」

(退学はノータッチかよ)

俺は心中で突つ込む

誠悟が心配そうに聞いてくる

八坂「もちろん無い、だから野宿でもしようかなと、思つてたんだ」

誠悟「だとすると妹はどうしたんだ?」

誠悟が聞き返してくる

八坂「一緒に来たよ、てつ、忘れてた」

八坂は思い出したように慌てて話し始めた

八坂「橋においてきた」

誠悟「家が決まるまで、家に来ないか?」

誠悟は提案した

八坂「良いのか?」

俺は少々驚く、今は藁にもすがりたい思いだ

俺は野宿でもかまわないのだが、月星さんには少々きつい様な気がする

そんな事を思つていると、誠悟と一緒に括り付けられていた女が口を開く

女「せいちゃん、この人誰?」

誠悟「ああ、忘れてた紹介するよ

東京に居たとき、色々と助けてもらつたんだ」

八坂「初めまして、八雲八坂と申します以後お見知りおきを」

女「服部彩です、よろしくね」

そんなこんなで服部彩と握手する

そんなグット^{バット}なタイミングで妹様^がやつてきた

月星「こんな所で、他の女なんかにうつつを抜かしてたのね」
などと言ふにチョークスリーパーをいきなりかけられる
しかもメツチャ入つてます！

八坂「ちょ、タップ、タップ」

もう落ちる寸前

八坂はそう言いながら妹の手を軽くたたく
誠悟「月星さんその位でやめておいた方が…」

月星は驚きの表情で一人を見つめる
周りが見えてないのか？ この妹様は

しかし、このままでは俺の命に係わるので
事の顛末を話し、月星の誤解を解く

そして誠悟の家へ向かう

その道中八坂は胸中に思いを抱く

誠悟たちは知らないであろうこれが必然である事を
これが破滅の道であることを

これが俺の選んだ終焉への物語である事を

俺の余命 陸ヶ月 ここで燃やしきくす

それまで俺は誠悟達をそして刀を守り抜く

この命を懸けて、この体を駆使して

今まで研鑽してきたこの技をいくして

俺は誠悟の唯一振りの刀と成る

そんな思いを抱き悪鬼と成った男は征く

男は最早人間では無い悪鬼である、修羅である

彼等の前であつたからこそ現さなかつたが
紛れも無い人斬りである
感情も無く人を斬捨てる唯一振りの刀である
いや刀と成つたのである
男は征く歴史を壊すために
物語が終焉へ向かつて歩き始める
悪鬼の物語が…

そう、これからがこの物語の始まりなのだと
時が歴史が狂い始める
正史から外れた物語へと
そのことを知つていいのは
この世に八雲八坂と…

そう、これから語るのは
遠い、遠い昔話だ
それは今も鮮明に思い出せる
これはある夏から秋に掛けて
悲しい青春のお話し

第壹話 異説 再会そして始まり 了

第壱話 再会《異説》そして始まり（後書き）

第壱話如何でしたか？

出来れば良いのですが
もしこの小説を読んで下さる
人がいるのならば

出来れば感想を書いて欲しいです

もしも、出して欲しい技等がありましたら
リクエストしてください出来る限り
期待に応えたいと思います
それでは、次回、また会いましょう。

第3話 居候生活、主従関係？の構築（前書き）

意外と早く代式話が出来ました
楽しんでください

第3話 居候生活、主従関係？の構築

八坂「と言つ訳で、本日よりお世話になります」

八坂「八雲八坂と申します、よろしくお願ひします」

俺は、とりあえず世話になるので、挨拶をする
誰について？ それは勿論 誠悟殿とその妹様にござります。
どうやら俺は、色々な意味で妹という存在に弱いようだ
こればかりは如何に鍛錬しようとも、強くなれない様だ
まあ、いきなりこうして挨拶をしているのも、不自然なので
とりあえず回想をご覧ください

八坂「しかし、誠悟、本当に大丈夫なのか？」

俺は、不安になり、聞いてみる

誠悟「何がだ？」

しかし、とうの誠悟は理解していない様子だった

八坂「いや、だから、私があなたの家に泊まる話なのよさ
いつもの癖で一人称が変わる

しかし誠悟は慣れているのか気付いていないのか気にしない

誠悟「ああ、その話か、大丈夫だと思う」

八坂（大丈夫だと思うって）不安だ
そんな事を話ながら誠悟の家へ着く

彩「せいちゃん、それじゃあ後でね」

そう言つて綾は家へと帰つた

八坂「ここが、誠悟の家ねえ」

思つていたより立派だった

誠悟「その言葉、皮肉としか受け取れないぞ」

誠悟は恨めしそうに言う

八坂「ああ、東京の本家の事か、住む人が居なくなつたから

売つ払つた」

誠悟「売つた！」

誠悟は心底驚いているように見える

いや、事実、驚いているのだろう

八坂「大切に使つてくれる人に売るのが一番だろ
私は爽やかに答える

しかし、誠悟はシマツタと言う様な表情に変わる

八坂「気にするな、アレは必然なんだから」

そう俺は答える

誠悟「必然？」

訝しげに誠悟はこちらを見る

八坂「きっと、運命なんだよ…」

俺は悲しそうな表情を浮べる

すると誠悟はバツが悪そうに話を切り替える

あたしも気まずいのでそれに便乗する

誠悟「そ、それよりも早く入ろうか」

八坂「ああ、そうだな」

月星（誠悟さんばかりお兄様と話してずるい）

ガラガラ～ 誠悟は戸を開ける

すると、何かが飛来すると同時に女が怒鳴る

女「お兄五月蠅い！」

女「家の前で騒ぐな変態！」

八坂（恐い）

すると誠悟も負けじと応戦する

誠悟「ちよつ、美琴さん落ち着いて

人が見てるんだから」

誠悟君めっちゃ腰が引けてるんですけど

すると みこと と呼ばれた女は俺たちを見てハツとする

少々顔が紅くなつてゐる様に見受けられる

八坂（ここは、小生が一肌脱ぐかな）

八坂「ミコトさんそれ位でよした方が…」

美琴「五月蠅い、この変態！」

八坂（変態！？）死のう…）

そう思い俺は鞄から短刀を取り出し腹に当てる
それを見た誠悟と月星が慌てて止めにはいる
ミコトさんはどうせその腕を下ろせる訳無いという顔をしている
だが、しかし、誠悟と月星は必死である

それは、そうであらう誠悟と月星は知つてゐるのだ

俺がこの腕を振り下ろせることを

しかしこれ位で死んでいては色々と申し訳が立たないので

一先ずやめる事としよう

私は短刀たんとうを仕舞うと非礼を詫びる

八坂「お騒さわがせして申し訳ありませんでした」

美琴「フンッ」

そういうてミコトさんは踵を返し家中に入つていく

八坂兄弟「誠悟すまん」

誠悟「いや、気にしてないよ」

そう誠悟は言ふ

いつもの事だと言わんばかりに…

実際、本当にいつもの事なのだが

月星（良かつた、お兄様が死なないで

でも死んだら死んだで一緒に居られるのに…）

八坂（何だろ、急に悪寒が…）

そんなこんなで家に入り

美琴さんの機嫌を直してから

交渉に入る

しかし結果は意外なものだつた

美琴「判りました、ただし月に陌ひやく萬円払つてもらいますから」

そう美琴は言つ

そして美琴は心中でそう思つ

美琴（払える訳が無い…）

美琴（絶対にこの家にこの人達を泊めない）

美琴（そり、絶対に…）

この事から考えるに、美琴さんは泊める気が無いようですが
しかし、相手が悪かつた…

不可能は無いと言われる、ハ雲ハ坂に、この勝負は分が悪かつた

月星（馬鹿ですね彼女は…）

月星（お兄様が払えないと思つて言つている

払える場合を考えてない、お兄様はきっと払う…）

月星（自分の為ではなく、愛しい妹の為に…）

月星（家を売ったお金があるのだから、そう言えればお兄様

最近、株で一儲けしたとか言つて、いたような気が…）

まあいい

月星は心底でそう思つていた

ハ坂は心の中でニヤリと笑う

ハ坂（ひゃくまん佰萬如何やら俺たちを泊める気はさらさら無いようだ

だがしかし彼女は大事な事を見逃して、いる）

ハ坂（それは何か、決まつて、いる、払える訳が無いと思つて言つて、いるのだ

払える場合を考えていな…）

ハ坂は人が嫌がる事がをするのが好きである

そう 善くも 悪くも

人をイラつかせるのが好きである

そしてこの時もまたその悪い癖が 病が 発病した…

今、手元には家を売り、そして、この島で買つ家のお金が入つてい

る 挪仟萬円ほど

じゅうまいおん

通帳には株で一山当てた資産が入っている
その内から百万円など 常人から言わせれば仟伍佰捌拾円

の内から毎月壹円引かれる様なものなのだ

誠悟（やばい、非常にヤバイ、八坂なら払う…）

誠悟には確信がある

八坂の性格を知っているから判つてしまつ

そう、八坂は人が嫌がる事がをするのが好きである
人の期待を裏切るのが好きなのである

今、美琴は八坂が払える訳が無いと思つて言つている

八坂は、美琴の期待を裏切り

?然とする顔を拝もうとしている

東京に居た時も、この様な事があつた。

そのときも同じく、払つたのである

東京に居た時も、俺が住んでいたマンションに入り浸つていた

その時、確か式拾億円ほど有つたはずだ零が多すぎて数えられなか

つたけれども…

誠悟（止めなければならぬ）

誠悟「いくらなんでもそれはチョットきついんじゃ」

誠悟は反論に向おうとしていたが… 予想通り

美琴「お兄は黙つてて！」

誠悟「ハイッ」

反論できなかつた

むしろそれどころか火に油を注いでしまつた

八坂「壹百萬！？」

八坂は驚いて見せた そう あくまでも 驚いて見せた のである…

ここから美琴の猛攻が始まる

実際は美琴が自分で自分を追い込んでいるに過ぎない

美琴「そり、壱百萬、払えないならこの家には泊まらせませんから」

美琴（お兄との時間を邪魔されてなるものですか）

しかし、美琴にとつては意外な回答が

誠悟と月星から見れば予想通りの回答が出される

八坂「良いですよ、とりあえず半年分払いましょう」

八坂はまるで新聞の集金を払つように言い放つ

月星（やつぱり…）

誠悟（やつぱり…）

月星と誠悟は予想より斜め上をいく回答に飽きれるばかりである
だが美琴は、その回答が信じられなかつた

美琴「なつ、陸佰萬万円ですよ、陸百円じゃないんですよー。」

美琴は聞き間違いだと思つたかつた

八坂「ええ判つてますよ」

だが八坂はやはりあつさりと言つてのける

美琴「現金一括払いですよ」

なおも美琴は反撃する

だが八坂は左手を挙げ月星に鞄を持つジエスチャーをする
すると月星はそれを見て取つてすぐに鞄を取る

月星「はい、お兄様」

八坂は渡された鞄を取ると、ジップを開け
中から札束を陸つ取り出す

八坂「はい、現金一括払い六百万円

不安なら数えてくれて構わない」

そう、ゴミでも捨てるように無造作に置く

美琴「お兄、何か言つてやつて」

そう誠悟に言つ

しかし誠悟は何も言わない 言えないのだ

と意訳で今に至るといつわけだ

氣のせいか回想の俺どつかの越後屋みたいだな
といふか気持ちの描写が俺だけじゃなかつた気がする
まあいいか

美琴「伊東美琴ですよろしく
そつけなく挨拶する

まあ無理も無い…

ハ坂「こちらこそよろしくお願ひ致します伊東美琴様

そして、伊東誠悟様これから何卒よろしくお願ひ申し上げま

す

俺は挨拶をする

理由は簡単 これから世話になるのだ 居候するのだ

これ位の事は当然である

月星「ハ雲月星でござります。 これから、兄共々よろしくお願ひ申し上げます」

いつして俺達は居候生活を始め主従関係？を構築した

しかし、そんなやり取りをしている頃
海岸ではとんでもない事が起つっていた…

そのお話は次の機会に

第3話 居候生活と主従関係？の構築 了

第3話 居候生活、主従関係？の構築（後書き）

次は海岸お話です
それではお楽しみに
どなたでも気軽に感想を
お寄せ下さい
参考にしたいと思います

第参話 覚悟・決意・業を背負つ者（前書き）

出来ました

思ひままに書き綴りました
よろしくお願いします

第参話 覚悟・決意・業を背負う者

第弐話にて八坂達が家で色々やつてる 同時刻
海岸にある男が目を覚ました

男「俺はまた負けたのか…」

この男は第壹話にて登場し八坂に秒殺された高田重行である

高田「俺は弱いのか?」

いやそんな筈は無いと言い切れずに居た

何故、俺はあいつに敗れたのか

それは判っている

俺とあいつの背負う業の違いだ
罪の違いだ

あいつはオレには考えられないほど重い業を背負つて生きている
俺にはその業を背負う覚悟は無い

そう覚悟の違い

あいつは最早、修羅

いや悪鬼と呼んだほうがいいのかも知れない

高田「八雲流活殺術か」

思わず、そう口にする

だが俺の我流魔剣には敵つまいであろう

あの剣を使うか

偶然にも八雲姓は同じ

だが違う八雲という人が打つてくれた刀

刀鍛冶の八雲

刀匠の名は八雲 四条じじょう

その男は生涯に仟振りの刀を打つたと言われている
そして、玖佰玖拾振り目からその性能は凄まじく斬れない物は無い
と言ふ

ハ雲鍛冶曰く人生最後の作 すなわち魂の作は鍛冶師の意思が宿る
と言われているらしい

もつとも俺のは九百玖拾式振り目である

だがその刀は恐ろしいほどに切れん。

故に俺は恐ろしくなり、巻き藁を壹度だけ、斬つて終わつた。

それ以来使つていない。

だが最早迷いは捨てる

奴と同じく一振りの刀となる

さすればあいつと対等だ

そう、俺も悪鬼になる…

高田「おー、お前ら起きろ」

チンピラ三人「あー、高田さん！」

男たちはあわてて起き上がる

高田「おれは決めた」

高田はイキナリそう言つた

男たちは声をそろえて聞く

何をですか？と

高田「刀を抜く！」

男たちにはそれだけで十分理解できた

男たち「本当ですか！？」

ついに覚悟を決めたんですねと男達は言つ

「ああ、だから、みんなで行こつ

はい！そつ言つて付いてくる

そして、高田は刀を腰に差す

皆はその姿をみて泣き出す

感動のあまり

高田も泣いている

感情を流しきる為に

刀となる為に

チンピラ「兄貴、刀を抜いて見せてくださいよ」

男は胸を弾ませて高田にそう言つ

高田は答える

「一寸先に逝つててくれ」 地獄へ

男三人「はい！行つてきます」誠悟の家へ

我流魔剣

チン チン チン

鯉口と切羽が触れ合つ音が三度する

そしてドタ バタ ゴト ドタン バタン ドシン

と言つ音がする

そう、高田は自分の仲間を斬殺したのだ
高田は、いや、かつて高田で有つた者は、地の底から響くかのよう

な声で言つ。

「飛燕剣」と

八坂の零閃は高田の知る限り

そう高田の知る限り瞬速の一閃である

対してこの飛燕剣は人が瞬きする間に三度抜き差しできる究極の居合いである

魔剣である この技を使って負けたことは一度も無い

この技にて八雲八坂を倒すのが高田重行の贖罪である

この夜一匹の悪鬼が誕生しそして同時に一振りの刀が生まれた

男はこの日

業を背負つて生きる覚悟をし

八坂を葬る決意をし

そして仲間殺しの業を背負つ者となつた

八坂と戦うのは何時になるかはわからない
どちらが勝つかも判らない

ただ勝負は居合いの勝負になる事であらう

男は八坂との死合での勝利を胸に思い描きながら
かつての仲間の遺体を埋める

男は泣かなかつた

いや泣けなかつた

泣くときは八坂に勝利した後
仲間に詫びながら自決するときと誓つて。

「…
いつしてまた一つ歴史が変わる…

第参話 覚悟・決意・業を背負つ者 了

第参話 覚悟・決意・業を背負う者（後書き）

本当はつくる予定のない話でしたが
高田さんが余りにも不憫なもので書いてみました
まあこの話で出てきた八雲四条とは何者なのか
それはいつかお話したいと思います
この話で実は八坂の過去が少し分かると思います
それでは次回「期待ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8008x/>

紅色に染まる夏

2011年11月26日16時53分発行